

明代内府の絵図本と視覚文化について

—— 西遊記の彩色絵図本を中心に ——

松 浦 智 子

MATSUURA Satoko

非文字資料研究センター研究員 神奈川大学外国語学部准教授

【要旨】 明の中後期、書籍・出版文化の勃興に伴い、基層の物語芸能が、挿画付きの通俗文学として大量に書籍化された。一方、基層文化から距離のあるはずの明代内府でも、彩絵『出像楊文広征蛮伝』、彩絵『大宋中興通俗演義』、彩絵『全像金字西遊記』（『唐玄奘法師西天取経全図』）といった彩色手鈔絵図を持つ通俗文学作品群が制作・受容されていた。これらの作品は、坊刻本をもとに制作されたと推定されるものである。他方、明代内府では、通俗文学作品以外にも、類似の彩色手鈔絵本形式を持つ勸戒書、教科書などが制作・受容されていた。こうした周辺の彩絵手鈔絵本群も、その多くが挿画を伴う坊刻本・官刻本などにもとづき制作されていた。

本稿では上記の事柄をふまえ、特に彩絵『全像金字西遊記』を中軸としながら、その周囲に広がる絵図文化を分析することにより、明代中後期の通俗文学が絵図と積極的に関わりながら、いかに制作、受容され普及していったのか、その一端を探ることを試みる。

A Study of Ming Court Illustrated Books and Visual Culture,

—— with a Focus on the Colored Illustrated Books of Journey to the West ——

Abstract : With the rise of books and culture related to publications in the middle and late Ming Dynasty, numerous oral narratives were published with illustrations as popular literary works. At the same time, even in the Ming Court that was supposedly separated from fundamental culture, colored hand-illustrated books such as the illustrated book 出像楊文広征蛮伝 (Illustrated Story of Yang Wenguang), the illustrated book 大宋中興通俗演義 (Romance of the Restoration of the Great Song Dynasty), and the illustrated book 全像金字西遊記 (Journey to the West with Gold Lettering) were created and accepted. These works are thought to have been made based on books published by commercial publishers. Other than works of popular literature, the Ming Court also created and accepted textbooks and books promoting good morals that were similarly colored hand-illustrated books. Many of these books were also created based on official or commercial publications, which incorporated many illustrations.

Considering the matters above, this paper will attempt to explore how popular literature from the middle and late Ming Dynasty was accepted and popularized while actively incorporating illustrations by analyzing the creation and acceptance of the illustrated book 全像金字西遊記 (Journey to the West with Gold Lettering) and the culture of illustrations surrounding this book.

はじめに

中国の明王朝の中後期、すなわち 16 世紀後半から 17 世紀初頭にかけて、銀流通の世界化に伴い、経済がそれまでにない速度で伸張した。こうした動きのなかで、出版文化が勃興し、従来、文字化されることの少なかった民間や基層の物語芸能が、娯楽的な読みもの、つまり小説や戯曲などの通俗文学として大量に刊行されるようになった。

大量の通俗文学の出現は、それまで支配層をなす男性知識人が中心であった「読書」行為を、新たな層へ拡大させる一つの原動力となったと考えられる。このことを示すように、この時期に登場した通俗文学は絵図入りの型式で刊行されることが多かった。この型式は、文字だけでは書籍の内容を理解することが難しい、富商や女性、武官といった中下級の識字層にも訴求力があったと思われるものである。

このように、絵図という非文字の媒体が、識字層の拡大を支えていただろうこの時期、一見基層から遠いようにも思われる明の内府（宮廷）でも、絵図を積極的に使った通俗文学が制作・受容されていたことを示す資料が複数残っている。南宋の岳飛の物語を描く『大宋中興通俗演義』、北宋の楊文広らの征南故事などを描く『楊文広征蛮伝』、西遊記故事を描く『唐玄奘法師西天取経全図』／『全像金字西遊記』、春秋列国の故事を描く『春秋五霸七雄通俗演義列国志伝』である。これらの作品は、明代内府に特有の版式を持ち、さらに高価な顔料や染料を多用した精緻な絵図を有することを特徴とする。つまり、明内府もしくはその周辺に関わると思いい、彩色絵本型式の通俗文学の作品群が存在するのである。

一方、明代の内府では、通俗文学以外にも、⁽¹⁾彩絵『御製外戚事鑑』（以下、彩絵『外戚』）、彩絵『明解増和千家詩註』（以下、彩絵『千家』）といった彩色絵本型式（以下、彩絵もしくは彩絵本）の教科書などが手書きで多く制作・受容されていた。これらの彩絵手鈔本群の版式や挿絵は、彩絵通俗文学のそれと酷似する。ならば、明内府における彩絵本型式の通俗文学の制作・受容は、明内府に存在した一連の絵本文化と地つづきのものであった可能性があるだろう。

筆者はこの点に着目し、これまで『大宋中興通俗演義』と『楊文広征蛮伝』の彩絵本について検証をおこない、一定度の成果をえてきた。そこで本稿では、その成果をふまえつつ、未だ先行研究が少ない『唐玄奘法師西天取経全図』／『全像金字西遊記』について、周辺の彩絵鈔本群を用いながら、分析を進めていくこととする。これにより、明の社会や文化にも大きな影響を与えた西遊記故事が、彩絵本という「非文字と文字」を組み合わせた型式で明の内府で制作・受容された背後に、いかなる文化的文脈があったのか、またその制作・受容自体にいかなる意味があったのか、考察を試みる。

I 彩色絵図通俗文芸の書誌情報

本節では論述の必要から、『唐玄奘法師西天取経全図』／『全像金字西遊記』の検証をおこなう前に、まず各彩絵通俗文芸の書誌情報を簡単に整理し、以前の論述でえられた『大宋中興通俗演義』⁽²⁾『楊文広征蛮伝』の制作・受容についての情報を確認していく。

A1 坊刻刊本着彩『新刊大宋中興通俗演義』（以下、坊刻着彩『大宋』または A1）

中国国家図書館所蔵、存巻 1、1 冊。着彩挿画は存 8 幅。所蔵番号は善 15725。〔万曆二十年前後〕〔周曰校〕万巻楼仁寿堂刊本の挿画に顔料・染料で着彩。版式は、四周单边、有界。半葉 13 行 26 字。白口の版心上に「全像大宋演義、魚尾、巻之幾、丁付、仁壽堂刊」の文字あり。外寸は縦 26.9 × 横 15.9。内匡郭は縦 21.4 × 横 13.8。A1 と同内容を持つ版本に、覆刻本〔万曆二十年代〕建陽余象斗双峰堂覆万巻楼刊本『新刊大宋中興通俗演義』（覆刻『大宋』）がある。

A2 彩色挿絵鈔本『大宋中興通俗演義』（以下、彩絵『大宋』または A2）⁽³⁾

中国国家図書館所蔵、存巻 4、5、6、8、9 計 5 冊。所蔵番号は善 09842。彩色挿画存 38 葉。版式は、有界、四周双边手鈔紅格、対向紅双魚尾、上下粗紅口、白綿紙。外寸は縦 34.1 × 横 21.0。内匡郭は縦 26.0 × 横 16.9。半葉 12 行、21～24 字。本文は手鈔楷書墨筆。匡郭外上部に墨筆書き入れあり。挿絵の左右に対聯を置く形式と挿絵の構図、および本文の内容（対聯の字句をふくむ）は、A1 坊刻着彩『大宋』と覆刻『大宋』に同じ。A2 は A1 にもとづいて制作されたと推定される。

B 彩色絵図鈔本『出像楊文広征蛮伝』（以下、彩絵『征蛮』または B）⁽⁴⁾

東洋文庫所蔵。所蔵番号は XI-3-B-33。存零本 2 冊。彩色絵図計 69 半葉。版式は、四周双边手鈔紅格、対向双紅魚尾、上下粗紅口、白綿紙。外寸は縦 34.2 × 横 21.1。内匡郭は縦 23.7 × 横 15.5。すべての葉の匡郭内に彩色絵図が描かれ、絵図の上に金泥で物語文と登場人物名が書かれる。現存部分には大まかに、楊文広、楊宜娘、楊再興ら兄弟の世代の「南蛮征伐」故事と、楊一郎、楊懷玉、楊順虎、楊満堂ら楊文広の子ども世代による「西霞征伐」故事が描かれる。B は坊刻本『征蛮伝』[佚]（この本の題名とその簡単な内容は、万曆三十一年〔金陵〕佳麗書林重刻『征播奏捷通俗演義伝』の双行注に見える）にもとづいて制作されたと推定される。

C 彩色絵図鈔本『唐玄奘法師西天取経全図』／『全像金字西遊記』（以下、彩絵『西遊』または C）

①中国北京大学所蔵＝『唐玄奘法師西天取経全図』。所蔵番号は NC1838-0023。②日本東北大学所蔵＝『全像金字西遊記』（一名『唐玄奘法師西天取経全図』）。所蔵番号は KK224/066。磯部彰氏の論考によれば、①と②は僚卷本⁽⁵⁾。①北京大本は、存帖本 3 冊、彩絵絵図計 140（？）半葉。版式は、外寸縦 29.0 × 横 19.5。内匡郭の尺寸は不明。匡郭内には彩色絵図が描かれ、そこに金字で簡単な物語文と登場人物名が記される。世徳堂本『西遊記』と比較した場合、①北京大本現存部分のおおよその内容は、その第 91～100 回にあたる。②東北大本は、存帖本 1 冊、彩色絵図計 28 半葉。磯部氏がドイツの骨董市で入手。タトウ紙で原本を再装釘している。原本の版式は、四周双边手鈔紅格、対向双紅魚尾（匡郭の線や魚尾はほぼタトウ紙の下に隠れているが、その一部を目視できる）、白綿紙。外寸は縦 29.3 × 横 19.7。原本の内匡郭は縦 23.2 × 横 16.0。匡郭内に彩色絵図が描かれ、そこに金字で簡単な物語文と登場人物名が書きこまれる。世徳堂『西遊記』と比較した場合、②東北大本の現存部分のおおよその内容は、その第 91、92、95、97、98 回に相当する。

D 彩色挿絵鈔本『春秋五霸七雄通俗演義列国志伝』（以下、彩絵『列国』または D）⁽⁸⁾

個人蔵。1947 年に鄭振鐸氏が北京の書肆で発見したのち所在が不明だったが、2009 年に泰和オークションに出品される。泰和公司編の挿絵影印本あり。8 巻 16 冊。彩色挿絵計 253 半葉。版式は、有界、四周双边黒格。対向黒双魚尾、上下粗黒口、白綿紙。半葉 13 行 25 字、本文は楷書手鈔墨筆。外寸は縦 37.7 × 横 23.5。本文の内匡郭は縦 27.0 × 横 19.0、絵図の内匡郭は縦 26.7 × 横 18.7。

泰和公司編挿絵影印には、「列国志伝引」1半葉、「列国志伝目録」1半葉、「列国源流總論」1半葉、巻1冒頭1半葉、巻8最終葉1半葉、本文が1~2行載る絵図32半葉、の文字情報が収載される。文字調査の結果、Dは、①建陽系8巻本、蘇州系12巻本、佚本を同時に参照して制作、もしくは、②現存建陽系8巻本、蘇州系12巻本を底本とした佚本を基に制作されたと考えられる。⁽⁹⁾

上述の書誌情報をまとめると、A2、B、C、Dはともに、大型の白綿紙に十数種類以上の顔料と染料で手鈔された精緻な彩色絵図を持ち、A2、B、Cは明内府本の定式である四周双边手鈔紅格、双紅魚尾などの版式を有する。この点をふまえ、A2彩絵『大宋』とB彩絵『征蛮』を周辺の関連資料とともに分析したところ、以下の諸点が明らかになった。

(イ) 明劉若愚(1584-?)『酌中志』巻1「憂危竝議前紀」によれば、万暦の内府には陳矩(1539-1607)ほか司礼監や乾清宮の宦官を通して「坊間」の書肆から「新書」の「小説、出像、曲本」など絵図入りの通俗小説、戯曲や、『人鏡陽秋』『閨範図説』『仙仏奇踪』などの絵図勸戒書類が買い入れられていた。それらの絵図本は、皇帝や貴妃に進覧され、『閨範図説』のように、貴妃などによって重刊・複製されるものもあった。⁽¹⁰⁾

(ロ) A1坊刻着彩『大宋』、A2彩絵『大宋』、B彩絵『征蛮』の彩色絵図・着彩絵図の使用色料、着彩技法、画風は、明代内府の彩絵『外戚』、彩絵『千家』等の彩色絵図本のものと同様ことから、司礼監や御用監の宦官らが管理する明内府画院の画工によって制作されたと推定される。

(ハ) 宦官によって内府に持ちこまれ、宮廷画工によって着彩されたA1坊刻着彩『大宋』は、A2彩絵『大宋』を制作する前の習作であり、A2は、A1を手本として制作されたと推定される。

(ニ) B彩絵『征蛮』も、宦官により持ちこまれた坊刻『征蛮伝』[佚]をもとに、制作されたと推定される。

(ホ) A2とBのもとづく坊刻本の出版時期と、避諱字等の使用状況から、その制作時期は、万暦二十年代以降から天啓・崇禎年間以前に絞りこめる。

(ヘ) 明の中後期の宦官たちは、土木の変を契機に作られた岳飛の詩文伝集『会纂宋鄂武穆王精忠録』(『精忠録』)をくりかえし重刊しており(『精忠録』の重刊は宦官勢力の複数回にわたる西湖岳飛廟修建を宣伝するためにおこなわれていた)、A1をふくめる坊刻本『大宋』はこの『精忠録』を継承する『会纂宋鄂武穆王精忠録後集』を附録として持っていた。宦官たちの岳飛に対する興味は、明代中後期の内憂外患を背景に出現した「宋代尊重」の気風をくみとったものと考えられる。

(ト) 以上のことから、宋の武将を題材とするA1、A2、Bは、宦官によって明内府に持ちこまれた坊刻本をもとに、政治パフォーマンスを意図した宦官が関与しながら、万暦二十年代~天啓・崇禎の間ころに制作された可能性がたかい。また、その受容者は、宮廷の女性、子ども、宦官などが想定される。

これらの検証結果は、⁽¹¹⁾A1、A2、Bと同様画風・着彩技法を持ち、内府特有の版式を持つC彩絵『西遊』や、A1、A2、Bと同様画風・着彩技法を持つD彩絵『列国』にも当てはめることが

できると考えられる。そのうち、C 彩絵『西遊』については、磯部彰氏による書誌情報の基礎的報告があるが、それ以上の踏みこんだ分析があまりなされていない。そこで以下、C 彩絵『西遊』について、A1～D の彩絵通俗文芸や、そのほか明内府製の彩色絵図本群などを用いて、その制作・受容の様相について検証することを試みる。

II C 彩絵『西遊』

(1) C 彩絵『西遊』の絵図

C 彩絵『西遊』は、版式の紅格・紅魚尾や、絵図の使用色料や画風の特徴から、やはり明代中後期



図1 C 彩絵『西遊』（『唐玄奘法師西天取經全図』）第十五半葉、東北大学附属図書館蔵



図2 B 彩絵『征蛮』第二冊第二十三葉b、公益財団法人東洋文庫蔵



図3 C 彩絵『西遊』（『唐玄奘法師西天取經全図』）第八半葉、東北大学附属図書館蔵

の内府で制作されたものと推測される。とくに、その画風は、万曆二十年代～天啓・崇禎以前ごろに制作されたと推定される A1 坊刻着色『大宋』、A2 彩絵『大宋』、B 彩絵『征蛮』や、明後期内府彩絵『外戚』、万曆十九年内府彩絵『補遺雷公炮制便覧』（以下、彩絵『雷公』）の絵図と、以下のような共通・類似部分を持つ。

① C 彩絵『西遊』の絵図と上述の諸彩絵本はみな、青〔群青〕、緑〔緑青〕、深緑、黄土、黄、金〔金泥〕、黒、紫、薄紅、赤、朱、茶、白〔鉛白、胡粉〕といった十種類以上の顔料・染料など高価な色料を使用。

② 絵図の上に金泥を使って故事内容や人物名を描く C の手法は、B 彩絵『征蛮』と同じ

【図1、図2参照】。

③白の顔料を厚塗りした上に他の顔料や染料で着色し模様を描きこむCの技法は、A1、A2、Bに酷似。また、零本という状態の悪さに比して、厚塗りの顔料の剥落が少ないことから、Cの色料や膠は上質なもので、着色技術も高度なものと判断される【図3参照】。

④Cの絵図と上述の諸彩絵図は、彩雲、金碧山水（背景）、樹木、人物、髪型、衣服、模様、敷物、陣幕、家屋、器物、小物その他の類型が共通もしくは酷似。

ここで試みに、④の類型について具体的に一、二例をあげてみる。たとえば、C彩絵『西遊』の第



図4 C彩絵『西遊』（『唐玄奘法師西天取経全図』）第十
九半葉「三犀牛」、東北大学附属図書館蔵



図5 A2彩絵『大宋』「牛頭馬頭」、
中国国家図書館所蔵品

17、18、20半葉に登場する三犀牛の姿は、A2彩絵『大宋』巻八「冥司中報應秦檜」に登場する牛頭の姿に次の点が酷似する：緑の袍衫の上に、腹当てをつけ、その上に赤地に金模様の腰までの短衣（縁取りは紺）を着て、白地に花模様の腰巻きを黒地に金模様の帯ひもでしめて、足には白の脚絆を巻いている。三犀牛の顔と牛頭の顔も酷似する【図4、図5参照】。

また、同じくC第17、18半葉に見える陣幕も、A1、A2、Bだけでなく、Dや彩絵『外戚』、彩絵



図6 C彩絵『西遊』（『唐玄奘法師西天取経全図』）第十
七半葉「陣幕」、東北大学附属図書館蔵



図7 A2彩絵『大宋』「陣幕」、中国国家図書館所蔵品



図8 B 彩絵『征蛮』第二冊第七葉b「陣幕」、公益財団法人東洋文庫蔵



図9 彩絵『外戚』第一冊第四葉b「陣幕」、公益財団法人東洋文庫蔵

『雷公』に登場する陣幕に次の点が酷似する：陣幕は半円形に開かれ、両端の支柱が赤（C、D）や紫（A1、A2、B、D、彩絵『外戚』、彩絵『雷公』）で、みな薄緑の背面を持ち、その上部には濃緑の生地に橙色の縁取りがなされた帯状の飾り布が配置され、全体に類似の地模様が描きこまれる【図6、図7、図8、図9参照】。

この二つの事例は、共通・類似例のほんの一部にすぎないが、このような細部にいたるまでの一致は、共通の見本や技法の伝授がなければ生じにくいものである。また、制作に資金力や人員が必要な彩絵本の性質を考慮すれば、C もやはり A1、A2、B と同じく明代後期の内府で制作されたものであった蓋然性がたかい。

もしこの推定が正しいとすれば、明後期の内府でC 彩絵『西遊』の制作を指揮・主導したのはどのような立場の人間であり、それを受容したのはどのような人々であったのだろうか。また、西遊記故事を題材とする彩絵本を経済資本や人的資本をつぎこんで制作し、それを受容することには、どのような意味があったのだろうか。このことを探る手がかりとなるのが、明宮廷と西遊記の故事や文芸との関わりを示す以下の諸資料群である。

（2） 明内府と西遊記の戯劇

そもそも西遊記故事・文芸と明宮廷の関係は、『永樂大典』卷一三一三九「送」字韻「夢」条に「魏徵夢斬涇河龍」の一段が収録されるなど、明の初期からまま見える。また、万曆二十年序の世徳堂本に『新刻出像官板大字西遊記』と「官板」の文字があり、同本の秣陵陳元之の序に「或曰出今天潢何侯王之國……，或曰出王自製」とあることから、明の嘉靖・万曆期に、西遊記の小説が内府や王府などと関係づけられて語られていたことがわかる。⁽¹²⁾

しかし、こうした西遊記故事や小説『西遊記』と明内府や王府の関連性を語る情報は断片的であり、その様相は把握しにくいものとなっている。その一方で、明の帝室と西遊記故事・文芸の関係をはっきりと示しているのが、明内府で上演されていた西遊記の戯劇である。

明内府との関わりが明らかな西遊記の戯劇テキストといえば、明の蔵書家の趙琦美（1563-1624、⁽¹³⁾号は清常道人）が所蔵していた次の脈望館鈔本雑劇があげられるだろう。

- 〈1〉 雑劇、正名『二郎神鎖齊天大聖』（存）、題目『花果園賞仙酒金丹』、末尾に「萬曆四十三年二月十七日校内本清常記」の記述と「断」と「穿関」あり。
- 〈2〉 雑劇、正名『灌口二郎斬健蛟』（存）、題目『眉山七聖擒妖怪』、末尾に「萬曆四十三年七月五之日校抄内本清常道人」の文字と「断」と「穿関」あり。
- 〈3〉 雑劇、正名『猛烈哪吒三変化』（存）、題名『慈悲攝伏五鬼魔』、第四折の正末「清江引」に「願大明享昇平萬萬年」の句と、雑劇末尾に「断」あり。

〈1〉～〈3〉にはそれぞれ明内府本の特徴である「断（劇末尾で高位の登場人物が唱える七言韻文）」や「穿関（上演時の衣装目録）」がある。また〈1〉〈2〉には趙琦美が万曆四十三年に「内本」つまり内府本を校定・鈔写したことを記す文言が見え、〈3〉の第四折末尾「清江引」にも「大明」を言祝ぐ歌辞が見える。これらのことから、〈1〉～〈3〉は万曆ごろの宮廷で実演されたテキストにもとづくものということがわかる。⁽¹⁴⁾そして、これら内府本テキストを所蔵していたのは、宦官の衙門の鐘鼓司であり、皇帝や后妃の前での実演も宦官らによっておこなわれていた。⁽¹⁵⁾つまり、内府における西遊記の演劇の制作や上演に、宦官たちが深く関与していたのである。

それを裏付けるように、『酌中志』巻一六「鐘鼓司」には、「又木偶戲，……或三寶太監下西洋，八仙過海，孫行者大鬧龍宮之類」という記述がある。ここに記されるのは木偶戲を使った戯劇の演目ではあるが、この資料からは、明内府で宦官の関与のもと西遊記故事がさまざまな文芸型式で上演され、それが宮廷内の人々に受容されていた状況が見てとれるだろう。

（3）西遊記故事と『鬼子母揭鉢圖』

このように、明内府で西遊記故事が戯劇などの型式で上演・受容されていた一方で、その関連故事が、絵図型式でも受容されていた可能性を示す記述が、『酌中志』巻七「先監遺事紀略」に見える。

萬曆中年，凡正月燈市節，司禮監掌印等各購擺設、器物、書畫、手卷、冊頁之類進御前。一日，先監（陳矩）偶購宋人所畫『鬼子母揭鉢圖』手卷，內有楷書金字『寶積經』、『鬼子母失子緣由』第一百六。名人題跋甚多。……其畫也，黯淡朽素之中神彩煥發，世尊之慈容可掬，鬼子母之悲煩可憫，鉢內之兒以手據地，兩目外注，欲出不得出之光景宛然。羣魔怪之凶狠瘳惡，眉目如生，種種伎倆，繁而不紊，必非宋以後人所能贋爲者。先監曰：“此卷甚好，然且未可進，恐萬歲爺疑我諫阻打宮人也。遂將『大學衍義補』一部，同此手卷，著人托王伴讀安轉送東宮，說陳矩頂上千歲爺，乞睿覽此書，暇時并覽此卷，蓋於奉之中，已密寓獻替之意云。”……

つまり万曆年間に、司礼監太監の陳矩が「宋人所畫『鬼子母揭鉢圖』手卷」を購入して、それを勸戒の意をこめて東宮（朱常洛、1582-1620）に進覧していた、というのである。『酌中志』巻一「憂危竝議前紀」に、万曆年間に「司禮監及乾清宮管事牌子，各於坊間尋買新書進覽，凡竺典、丹經、医、

ト、小説、出像、曲本靡不購及。先臣陳太監矩凡所進之書必冊冊過眼」と記述されることに鑑みれば、陳矩は『鬼子母揭鉢図』を「坊間」から購入していた可能性が高い。⁽¹⁶⁾

この『鬼子母揭鉢図』は、『宝積経』（『雜宝藏経』）の「鬼子母失子縁由」すなわち「人の子を喰らう鬼子母（訶梨帝）に子を失う痛みをわからせるため、仏がその末子を鉢の下に隠してしまい、鬼子母が眷属に鉢を持ちあげ（掲開）させようとする」という鬼子母揭鉢故事の場面を図画化したものである。⁽¹⁷⁾

一方、鬼子母揭鉢故事は、少し形を変えて明の西遊記の戯劇のなかにも姿をあらわしている。万曆四十二年序（埋木改刻）『楊東來先生批評西遊記』劇（以下、楊劇『西遊記』）第一二齣（卷三第四齣）「鬼母皈依」である。この楊劇『西遊記』は、明初の楊景賢の原本に連なる鈔本に、楊東來が誤字脱字などの修訂を加えたものとされる刊本であるが、その第一二齣では、「三蔵が鬼子母の子である紅孩児（愛奴児）にさらわれてしまい、孫悟空に助けを求められた如来が紅孩児を鉢盂（法座下）のなかに閉じこめたところ、鬼子母が紅孩児を救出すべく鉢盂を持ちあげよう（掲鉢）とする」という筋が描かれる。これは明らかに鬼子母揭鉢故事の変形版である。

ここで重要になってくるのは、楊劇『西遊記』「楊東來先生批評西遊記摠論」に「一、……而西遊記居其一焉，然僅見抄録秘本，未經鏤板盛行」とあり、また同劇「西遊記小引」に「但天庭異藻，不當終秘之枕中」という記述が見えることである。これらの記述にもとづけば、先行研究でも指摘されるように、⁽¹⁹⁾万曆四十二年序の楊劇『西遊記』が依った鈔本は、内府もしくは王府に関わるものであったと推定される。もしそうであるならば、宦官の陳矩や太子常洛は、楊劇『西遊記』に見える鬼子母揭鉢故事の変形版、もしくは類似の筋を知っていた可能性がある。⁽²⁰⁾

そもそも、西遊記故事と鬼子母の関係は、宋『大唐三蔵取経詩話』第九「入鬼子母国処」の段階から早くも見えている。⁽²¹⁾また、掲鉢故事自体は、現存する小説『西遊記』には見えないものの、鬼子母は世徳堂本『西遊記』第四二回に二十四路諸天として登場しているし、同第五八回には如来が鉢盂によって六耳獼猴をとらえるという掲鉢故事と共通する要素を持つストーリーも見える。このような西遊記故事と鬼子母および掲鉢故事の密着度や、万曆内府における西遊記戯劇の盛行ぶりを考慮すれば、宦官の陳矩も太子常洛も、『鬼子母揭鉢図』を西遊記故事・文芸と関連させながら理解し受容していた可能性があるだろう。

そして、ここで確認しておきたいのは、宦官の陳矩が、坊間で購入したであろう『鬼子母揭鉢図』を、太子常洛へ勸戒のために献上した、と『酌中志』で述べられていることである。この記述からは、(1) 宦官が西遊記故事とも密接に関わる絵図を坊間で購入し、(2) それを「仏画による勸戒」という宗教性・政治性を帯びた教育目的で献上し、(3) その絵図を太子＝子どもという中下級の識字者が受容していた、という構図が見てとれる。この構図は、(1) 宦官が坊間で購入した版本（A1 等）をもとに、A2 彩絵『大宋』や B 彩絵『征蛮』が制作され、(2) その制作の背後には宦官の政治的宣伝の意図があり、(3) これらを女性、子ども、宦官が受容していた、という A2、B の制作・受容の構図とよく似るものである。

このように、西遊記故事と密着した『鬼子母揭鉢図』が、A2、B などと共通する構造のなかで明内府にもたらされ、そこで受容されていたのならば、C 彩絵『西遊』の制作・受容の過程や背景にも同じ構造が存在したと想定できるだろう。そして、そのことを裏付けているのが、彩絵通俗文芸以外

の明内府製の彩色絵図本群である。

Ⅲ 明内府彩色絵図本群と西遊記故事の関係

(1) 彩色絵図本群の分類

本稿末尾の【表1】は、現段階で筆者が明内府制、もしくは明内府に関連すると推定しえた彩色絵図本の一覧である（紙幅の関係で【表1】にはA1～Dは掲載しない）。ここにあげた明代内府に関わる彩絵本は、当時制作されていただろうものの一部にすぎないだろうが、これら現存本を見るに、その内容には一定の傾向があることがわかる。その傾向をごく大まかにわけると、①仏道など宗教関連の書籍〔仏1, 2, 10, 11, 15／道3, 4, 8, 9, 18／三教13〕、②本草系列の書籍〔6, 7, 14〕、③教科書・勸戒書系列の書籍〔5, 12, 16, 17〕、④通俗文芸類〔A1～D〕とすることができる（〔 〕内、【表1】の書籍番号）。以下まず、数の少ない②と③について、C彩絵『西遊』の分析と関わる部分から簡単に書誌情報を整理・確認する。

はじめに、②本草系に分類した書籍であるが、一番早期の弘治十八年彩絵『本草品彙精要』〔6〕⁽²²⁾（以下、彩絵『本草』）は、弘治帝（孝宗 1470-1505）が、太医院院判の劉文泰に編纂させた医薬本草書である。この彩絵『本草』にもとづいて、〔正徳〕彩絵『食物本草』〔7〕や万暦十九年彩絵『雷公』〔14〕などの鈔本が明内府でくりかえし制作されていたのだが、これらの書籍のなかに色濃く見える道教的養生思想を考慮すれば、②は①の道教系の書籍に関わる要素を持つものとも見なせる。

②本草系の書籍のうちC彩絵『西遊』との関係で注目されるのは、彩絵『本草』の巻首に、「錦衣衛前所旌節司百戸 王世昌（1462? -1531 以後）」⁽²³⁾ほか、宦官が所管する宮廷画院の画師の名が八名分

記載されていることである【図10参照】。本資料は、明宮中における彩絵本の制作過程を明示するものであるが、この彩絵『本草』を継承する万暦十九年彩絵『雷公』には、第Ⅱ節（1）で上述したように、Cと酷似する絵図が見える。このことは、Cの制作に明後期の内府の宦官、画工らが関わっていただろうことを裏付けているだろう。

次に、③教科書・勸戒書類であるが、外戚の善悪の事例を示す彩絵『外戚』〔17〕や鄭紀（1438-1513）が皇太子の講読のために進献した彩絵『聖功図』〔5佚〕⁽²⁴⁾は、張居正（1525-1582）『帝鑑図説』、焦竑（1573-1620）『養正図解』など、明後期宮廷における皇太子（もしくは皇長子）教育に関わる一連の絵図教科書の系譜に連なるものだと考えられる⁽²⁵⁾。また、彩絵『千家』〔16〕も、『酌中志』卷一八「内板経書紀略」に「皇城內相學問、……看『性理』『通鑑節要』『千家詩』……」とあり、また『酌中

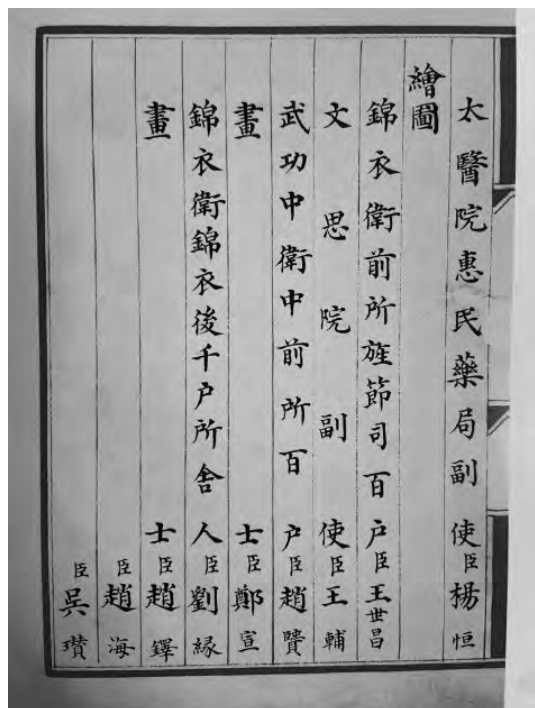


図10 弘治十八年内府彩絵『本草品彙精要』巻首記載の明内府画院の画工名、武田科学振興財団杏雨書屋所蔵

志』巻一六「内書堂讀書」や「宮内教書」条に『千家詩』や『千字文』『孝経』などを用いて子どもの宦官や宮女の教育がおこなわれていたと記録されることに鑑みれば、やはり教科書的な機能を持っていたと理解できる。そして、これら③の彩絵本のうち、彩絵『外戚』は宣徳年刊の内府刻本に、彩絵『千家』は、万暦二年坊刻の『明解増和千家詩註』（もしくはその中間テキスト）にもとづき制作された⁽²⁷⁾と指摘されている。

ちなみに、陳矩ら宦官たちが明万暦期の宮中に持ちこんだ『人鏡陽秋』『閨範図説』などの絵図本も、教科書的な機能を期待されて坊間で購入されていたとも考えられる（第Ⅰ節記述と注（10）引用『酌中志』巻一「憂危竝議前紀」を参照）。そのうち、『閨範図説』が万暦帝（神宗 1563-1620）の後妃・鄭貴妃（1565-1630）によって重刊されていたことを、彩絵『外戚』、彩絵『千家』の制作過程とあわせて考えると、「内府刻本／坊刻本→彩絵本／絵図本」という、明内府での絵図本制作の経路が見えてくるだろう。

このように、③の諸本からは、彩絵本の制作経路と、制作・受容に宮中の宦官、子ども（東宮、子どもの宦官）、女性（后妃・妃嬪、宮女）が深く関与していたという現象が確認できる。

そして、【表 1】の絵図本のなかでも一番分量の多い①であるが、これらが C 彩絵『西遊』の制作・受容の性質を考える上で、最も重要な手がかりとなる。

①宗教関連の彩絵本のうち、まず目をひくのは、「嘉靖頃内府」刊本着彩『仏母大孔雀経』[11]（以下、「嘉靖」着彩『孔雀』）、万暦三十二年刊本着彩『仏母大孔雀経』[15]（万暦着彩『孔雀』）ほかの仏教經典や、嘉靖六年内府彩絵『九天応元雷声普化天尊説玉枢宝経』[8]（以下、彩絵『玉枢』）、嘉靖二十二年内府彩絵『太上玄霊北斗本命延生真経』[9]（以下、彩絵『北斗』）ほかの道教經典の量の多さであろう。

もともと明内府では、宦官の衙門・司礼監が所管する内経廠で、儒仏道の經典などが刊行されていた⁽²⁸⁾ので、この現象自体には不思議な点はない。そして、明内府刊本の名を記す『酌中志』巻一八「内板経書紀略」に「仏母大孔雀経三本」の文字が見え、明内府刊『正統道蔵』に『玉枢』や『北斗』が収録されていることを考慮すれば、万暦着彩『孔雀』諸本や彩絵『北斗』、彩絵『玉枢』も、内府刊本にもとづき作成された⁽²⁹⁾と理解できるだろう。このうち、「嘉靖」着彩『孔雀』は巻末題記に見える「内官監太監臧罰庫管事信官田有澤」が、彩絵『北斗』は蓮牌木記に見える「中宮皇后」⁽³⁰⁾が、制作させたものである。ここにも、明内府の宦官や后妃らが彩色絵図本の制作・受容に関与していた様子が見てとれる。

（2）宝巻と C 彩絵『西遊』

一方、これらの彩絵本を西遊記故事との関わりから見たとき、注目されるのは、正統五年彩絵『目連尊者救母出離地獄生天寶巻』一卷（以下、彩絵『目連宝巻』）⁽³¹⁾という宝巻である。上下双辺手鈔紅格の内府定式を持つこの宝巻は、群青で地塗りした末尾の蓮牌木記に「大明正統五年皇妃姜氏敬獻」と金泥で書かれているため、明の皇妃・姜氏の命によって内府で制作されたものであることがわかる。

この正統五年彩絵『目連宝巻』には、西遊記故事との直接的な影響関係は見えない。ただし、目連故事と西遊記故事につながりについては、万暦十年鄭之珍『目連救母勸善戯文』（以下、『目連戯文』）

中巻に西遊記故事が見えることなどから、先行研究で何度も指摘されている。⁽³²⁾ 両故事の影響関係がいつごろから生じたのかについては諸説あるが、両者の芸能が瓦舍などの芸能場で上演されていた宋代ごろから、文芸的な融合が生じていた可能性を指摘する研究もある。⁽³³⁾ 実際、『東京夢華録』巻八の「目連救母雜劇」上演についての記録や、南宋『大唐三蔵取経詞話』の存在などが、目連故事や西遊記故事の宋の演芸場での人気ぶりを示している以上、その可能性は小さくないだろう。ともあれ、少なくとも『目連戯文』が出現した万暦十年までには、両者の融合が生じていたことは確実である。

そもそも目連故事と西遊記故事が接近・融合したのは、両者がともに「仏教とその周辺に関わる事象」を主題としていることに起因することはいうまでもないだろう。主題・構造・要素が似る故事同士が、文化的機能面から、相互に近づき融合することは、文芸領域ではよく見られる現象である。

こうしたことがいえるとき、着目されるのは、『目連戯文』に見える西遊記故事の内容が、世徳堂『西遊記』のものとはあまり一致せず、むしろ鈔本『銷釈真空宝卷』(以下、『真空宝卷』)に見える西遊記故事に近いものとなっている、ということである。⁽³⁵⁾

『真空宝卷』は、その鈔写・制作年代について諸説あるが、開首の『拈香贊』に「『無爲卷』、最堪誇、功能無價」と記されていることなどから、明の正徳年間ごろから活動を始めた羅祖羅教の五部六冊に関わる無爲教系統の宝卷だといわれる。⁽³⁶⁾ また、そこに反映されている西遊記故事は、おそらく明代前半期ごろから中期ごろのものを反映すると指摘されている。⁽³⁷⁾

そもそも、羅教をふくめ明の教派系宝卷には、西遊記故事を取り入れているものが少なくない。たとえば、羅教の五部六冊の万暦二十三年刻本『嘆世無爲卷』(以下、『無爲』)、正徳四年原刊『正信除疑無修証自在宝卷』(以下、『自在』)、⁽³⁸⁾ 羅教の流れをくむ黄天道の万暦十四年原刊『普静如来鑰匙宝卷』(以下、『鑰匙』)、⁽³⁹⁾ 万暦年間に飄高(隆慶年間?-?)がたてた弘陽教の万暦三十六年刻本『混元弘陽如来無極飄高祖臨凡宝卷』(以下、『臨凡』)などである。⁽⁴⁰⁾ このうち五部六冊の『無爲』や『自在』には、『目連宝卷』からの引用もあり、⁽⁴¹⁾ ここにも目連故事と西遊記故事の性格や文化機能の近さが見てとれる。そして、重要なのは、こうした特徴を有する宝卷が、明の宦官や妃嬪など、内府に連なる人々と関わりながら刊行されることが少なからずあった、ということである。⁽⁴²⁾

たとえば、『臨凡』である。この宝卷の第二十四品「取梅檀臨凡送経取経遇弘陽法普度衆生作證品第二十四」には、西遊記故事と西天取経の絵図が描かれているのだが、その序文には、

自從萬曆年中，初立混元祖教，二十六歲上京城，也是佛法有應，先投奶子府內，轉送石府宅中，定府護持大興隆，天下春雷響動，御馬監程公、內經廠石公、監甲廠張公、三位護法，同讚修行。⁽⁴³⁾

と、二十六歳で北京にのぼった弘陽教の教祖の飄高が、宦官の衙門である礼儀房所管の「奶子府」に入りこみ、「石府宅」をへて、「御馬監程公、內經廠石公、監甲廠張公」といった宦官より大きな後援をえた、と記されている。このことについて、清道光年間の黄育榘は『又破邪詳辯』巻1で、

……御馬監程公，即太監陳矩，將陳字訛爲程字。內經廠石公即太監石亨。……監甲廠張公，即太監張忠。此時太監皆信邪教，而獨言此四人者，以太監每以貪富相爭勝，惟此四人，積財甚富，印經最多，固非他人所能及也。……⁽⁴⁴⁾
⁽⁴⁵⁾

と説明し、万暦期において宦官らが「印經」によく関与していたと説明している。これらの記述から、当時、教派系の宝巻が宦官などの援助をえて制作・受容されていた様子が見てとれる。このうち、「内經廠」すなわち官板の板木・書籍を所管する官署の宦官も、教派系宝巻の刊行に関わっていたことは、注意されるだろう。もちろん、民間宗教たる教派系の宝巻が内府で刊行された可能性は低いだろうが、西遊記故事を取り入れた絵図つき宝巻が内經廠の宦官の援助のもと作成されていた事実は、C 彩絵『西遊』の制作・受容の過程を考える上で大きな意味を持っている。

そして、弘陽教の教祖・飄高が最初に入りこんだ「奶子府」が、皇子や皇女の「乳媼」となる女性を所管する官署であったこと⁽⁴⁶⁾に鑑みれば、これらの宝巻は、宮中の女性たちにも受容されていたと考えられる。

このような宮中の女性と宝巻の関係性は、妃嬪らが出資して宝巻を制作した内府製の彩絵『目連宝巻』の例に明確に見てとれるだろう（民間教派系宝巻とは一線を画すものの）。さらに、妃嬪や公主の出資によって彩色宝巻が制作されていた事例は、嘉靖二十二年着彩『藥師本願功德宝巻』⁽⁴⁷⁾ [10]（以下、着彩『藥師宝巻』）にも見える。着彩『藥師宝巻』の蓮牌木記には、

大明德妃張氏，同五公主，謹發誠心，喜捨資財，命工彩畫“佛総靈山會西方境斗母等聖像”十四軸、“道総三皇聖祖南北斗等聖像”十九軸，共三十三軸，香花灯燭，永遠供養，拜讚刊刻『藥師宝巻』板一副，印施流通，宣誦消災延生，印造『王靈官經』一百卷、『土地經』一百卷，諷誦功德，依憑善利，永保，金枝盛茂，惟願，九重殿上，常霑雨露，洪恩侍觀，龍顏四序，常臻吉慶，四恩総報，三宥均資，法界有情，同登彼岸。大明嘉靖二十二年十二月二十五日施。／板在西長安街双塔迤西李家鋪内

とあり、『藥師宝巻』が德妃張氏と公主五人の出資のもと、「西長安街雙塔」西の「李家鋪」なる北京の坊間書肆で刊行されたことが書かれている。妃嬪や公主たちは、この『藥師宝巻』の刊行とともに、仏画と道教画三十三軸を「命工彩畫」させたことから、坊間で刊行された『藥師宝巻』に着彩したもの、明内府の画工であった可能性もある。実際、着彩『藥師宝巻』の絵図の異時同図の構図・技法・画風は、同じく異時同図の手法をとる彩絵『外戚』⁽⁴⁸⁾ [17] のものとよく似ている。ならば、A1 着彩『大宋』、A2 彩絵『大宋』、B 彩絵『征蛮』で見られたような、「坊間刻本→彩絵・着彩本」という制作過程が、着彩『藥師宝巻』の制作にも存在したとも考えられるだろう。

おわりに

第 III 節でのべた内容をまとめると、次の要点が浮かびあがってくるだろう：

(1) ①宗教系、②本草系、③教科書・勸戒書系とのジャンルを問わず、明内府やその周辺に出現した彩絵本の制作・受容には、宦官、子ども（東宮、子どもの宦官）、女性（后妃・妃嬪、宮女）などが関わっていた。

(2) ①③の諸本の制作には「内府刻本→彩絵・着彩本」または「坊刻本→彩絵・着彩本」の過程が存在した。

(3) ①の彩絵宝巻類と、西遊記故事を持つ宝巻の制作・受容には、明内府の宦官、女性（妃嬪、宮女）が関わっていた。

これらの諸点を勘案すれば、C 彩絵『西遊』はやはり A1～B と同じく、中下級の識字層たる宦官や宮廷の女性などによって制作され、同時に宦官、女性、子どもに受容されていたと推定できるだろう。ならば、C が彩絵本という型式で制作・受容されたのも、絵図の視覚情報により文章の内容理解をうながすというこの型式が、中下級の識字層に訴求力があったため、ということになる。しかも、「受容者の目を楽しませる」という絵図が持つ娯楽的本質は、通俗文芸たる西遊記故事の娯楽性にも通底する。ここに、C が彩絵本という型式で制作・受容された、第一義的な意味があったといえるだろう。

ただし、C 彩絵『西遊』の制作・受容には、こうした第一義的な意味の上に成りたつ、さらなる文脈があったと考えられる。それを示しているのが、西遊記故事が（部分的な要素レベルではあるが）、明内府の彩絵・着色本のなかでも数が多かった①宗教系の彩絵・着色本群とそれぞれ関わりを持っている、ということである。

たとえば、彩絵『孔雀』[11、15] で説かれる「佛母大孔雀明王」は、世徳堂『西遊記』第七一回の賽太歳（金毛猿）の調伏故事にも、間接的ではあるが登場している。もともと仏母孔雀大明王と西遊記故事の関わりは古く、宋代に作られた福建泉州開元寺の西遊記レリーフの猴も「孔雀□王經」と記される經典を腰からぶらさげている。また、彩絵『玉枢』[8] の「九天応元雷声普化天尊」も、世徳堂『西遊記』第四五回の雨ごい合戦部分にやはり間接的ながらも登場するし、第五一回や第八七回でも、雷部の雷神・雷将らの兵力を借りにいく部分に、九天応元雷声普化天尊がいるはずの九天応元府が登場している。さらに、彩絵『北斗』[9] の主題である北斗星は、西遊記のなかでは天蓬元帥（『雲笈七籤』では天蓬元帥は北斗太帝の將軍とされる）との関わりや、北斗星君などとの関わりなどから、その姿を認めることができるだろう。

西遊記故事とこれらの要素の関わりは、いうまでもなく、西遊記が仏教・道教的世界を基礎に構築されている故事だから生じたものである。このことは、逆説的にいえば、西遊記故事が、こうした仏教・道教・民間宗教もふくめた総合的な「信仰体系」のなかで、人々に理解され、受容されていた側面を持っていた、ということの意味している。だからこそ、少なからぬ教派系宝巻が西遊記故事を取りこみながら制作・受容されていたわけであり、この現象は、まさに当時の人々が西遊記故事に対してこのような理解の仕方を持っていたことをよく示しているだろう。ならば、C 彩絵『西遊』には、現在われわれが考えるような「通俗小説・文芸」という枠組みをこえて、「信仰体系」と関わる理解のなかで、明内府において制作・受容されていた部分があったと考えられる。

実際、C 彩絵『西遊』の現存部分には、仏教や道教に対する信仰要素が強く表れている場面が残っている。たとえば、C の北京大本に残る、世徳堂『西遊記』第一〇〇回「徑回東土、五聖成真」に相当する場面を描く絵図である。そこには、取経を終えて靈山に呼び寄せられ仏となった三蔵一行が如来に拜謝する場面や、如来が白馬の前世が龍王の子であることを言い渡す場面などが描写されており、前者の絵図には「長老四衆、俱叩頭謝恩」の金字が、後者の絵図には「又叫白馬、汝本龍王之子、因有不孝之罪、駝聖經有功、加陞汝馬八部天龍馬」の金字が物語解説として添えられている。⁽⁴⁹⁾

また、東北大本の第二十八半葉に見える、世徳堂『西遊記』第九五回「仮合真形擒玉兔、真陰帰正

会霊元」に相当するだろう一場面では、彩雲とともに中空に出現した道教神・太陰星君（太陰元君、月神）に向かって三蔵や八戒、悟浄らが拜謝する絵図が、「唐僧與多官，亦望空拜謝」との金字解説文とともに描かれている【図11】。これらの仏道の彩絵と金字の解説は、受容者の「信仰観念」を十分に刺激するものだったと見なせるだろう。

もし、ここまでの論が妥当ならば、Cの彩絵本という型式には、「宗教的な絵解き」のための機能、すなわち宝巻の宣講（宣巻）などに類似する機能もあった可能性があるだろう。

たとえば、Cと宝巻の宣講（宣巻）などとの近さは、明の小説『西遊記』が『目連宝巻』などと同じく地獄めぐり故事（第一〇、一一回）を持つことから指摘できるかもしれない。地獄めぐりの要素は、宝巻文芸の一種の定型であり、絵図を用いた地獄の解説は、民衆の勸戒・教化を目的とする宝巻／宣巻の必須の要件であった⁽⁵⁰⁾。実際、教派系宝巻とは一線を画すものの、着色『葉師宝巻』は“宣誦”（木記）されていたし、彩絵『目連宝巻』も絵解きのようなことがなされていただろう。ならば、これらの宝巻と共通・類似要素を多く持つCが、ある種の「宗教的」要素をふくんだ絵解きの書として使用されていた、と想定することは可能だろう。陳矩が勸戒を目的として、西遊記故事とも関係する『鬼子母揭鉢図』を太子・常洛に献上したのも、このことを裏付けているだろう。



図11 C彩絵『西遊』（『唐玄奘法師西天取經全図』第二十八半葉、東北大学附属図書館蔵）

*本稿は、科学研究費若手研究「明代内府制通俗彩絵本から見る近世中国通俗文学と視覚文化の関係」（19K13089）及び科学研究費基盤研究（C）「明内府彩絵通俗文学と絵図本など視覚文化から見た新興「読者層」の諸相」（23K00346）の研究成果の一部である。

注

- (1) 彩絵『外戚』の分析については拙稿「明代内府で受容された宋の武人の絵物語」（『宋代史料への回帰と展開』汲古書院、2019年）157-158頁を参照。
- (2) 拙稿「東洋文庫蔵『出像楊文広征蛮伝』について」（『中国古籍文化研究』東方書店、2017年）243-256頁、および前掲注（1）拙稿「明代内府で受容された宋の武人の絵物語」。
- (3) A1とA2の詳細については、前掲注（1）拙稿「明代内府で受容された宋の武人の絵物語」147-188頁を参照。
- (4) Bの詳細については、前掲注（2）拙稿「東洋文庫蔵『出像楊文広征蛮伝』について」参照。また、当該拙稿にはBの物語文全文を掲載。彩絵『征蛮』の書影は以下URL：http://124.33.215.236/gazou/2009/gazo2009_read.php?TGName=XI-3-B-33_1
- (5) 磯部彰「清朝宮廷演劇文化の研究」研究成果集 V『『西遊記』画三種の原典と解題』（明倫社、2012年）4-7頁。
- (6) 北京大本の寸法は、磯部彰『『西遊記』資料の研究』（東北大学出版会、2007年）402頁に拠る。また、『北京大学図書館蔵書展覧第一回中国古籍挿絵本選展』（有隣堂、1987年）に北京大本の影印が部分的に収録される。

- (7) 東北大本の書影は以下 URL：<https://archives.cneas.tohoku.ac.jp/collection/eapub/5625>
- (8) 書籍の寸法は、劉禹等監制『春秋五霸七雄通俗演義列國志伝』（泰和嘉成拍賣有限公司、2009 年）目録ページの記載に拠る。
- (9) D 列国の依拠した版本の分析については、松浦智子「彩繪《春秋五霸七雄通增演義列國志傳》の初步探討」（台湾国立嘉義大学「第七屆中國小說與戲曲國際學術研討會」、23 年 11 月 18 日口頭発表、予稿有）を参照。
- (10) 明劉若愚『酌中志』卷 1「憂危竝議前紀」：「神廟（神宗萬曆帝）天性至孝，上事聖母，勵精勤政，萬幾之暇，博覽載籍。每論司禮監及乾清宮管事牌子，各於坊間尋買新書進覽。凡竺典、丹經、医、卜、小説、出像、曲本靡不購及。先臣陳太監矩凡所進之書必冊冊過眼，如『人鏡陽秋』、『閨範圖說』、『仙仙奇踪』等類。每歲之中，何止進數次，所進何止數十部哉。因先年神廟曾將『閨範圖說』一部賜鄭貴妃，於萬曆乙未（二十三年）秋貴妃捐貲重刊。蓋此書乃呂少司寇坤編纂。……」
- (11) (二) の検証過程の詳細については、前掲注 (2) 拙稿「東洋文庫蔵『出像楊文広征蛮伝』について」を参照。(ロ)(ハ)(ホ)(ヘ)(ト) の検証過程の詳細については前掲注 (1) 拙稿「明代内府で受容された宋の武人の絵物語」を参照。
- (12) ただし、世徳堂本『西遊記』と内府・王府の関係については種々異論がある。本稿ではその当否は問わず、明代後期に小説『西遊記』が内府・王府と関係があるかのように語られていたその状況を重視する。世徳堂本『西遊記』については、おもに前掲注 (6) 磯部彰『『西遊記』資料の研究』第 5 章「世徳堂刊西遊記の版本研究」119-229 頁、上原究一「世徳堂本『西遊記』版本問題の再検討初探：他の世徳堂刊本小説・戯曲との版式の比較を中心に」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』、2009 年第 12 号）12-28 頁他の論文を参照。
- (13) 以下の脈望館鈔本雜劇はみな『孤本元明雜劇』および『古本戯曲叢刊』四集に収録される。この他、西遊記と関連すると目される脈望館鈔本雜劇はまだあるが、ここでは明らかな関わりが指摘されるものだけ取り上げる。
- (14) 雜劇の内府本の特徴については、おもに孫楷第『也是園古今雜劇考』（上雑出版社、1953 年）「一、收藏、趙奇美」4 頁以下や、小松謙『中国古典演劇研究』（汲古書院、2001 年）Ⅱ第三章「『脈望館鈔本古今雜劇』考」125-149 頁等を参照。
- (15) 『明史・職官志・宦官』卷 74「鐘鼓司，掌印太監一員，僉書・司房・學藝官無定員，掌管出朝鐘鼓・及内樂・傳奇・過錦・打稻諸雜戲。……十二監四司八局所，謂二十四衙門也」、「万曆野獲編」「禁中演戲」卷 1「内廷諸戲劇，俱隸鐘鼓司」。
- (16) 前掲注 (10)『酌中志』卷 1「憂危竝議前紀」引用文を参照。
- (17) 『掲鉢図』については、楽愕瑪 (Emmanuelle Lesbre)「『掲鉢図』卷研究略述」（『美術研究』1996 年）、楽愕瑪：「『掲鉢図』卷研究略述」（『美術研究』1997 年）、李翎「鬼子母掲鉢故事的流传与图像」（『世界宗教文化』2014 年第 1 期）他を参照。
- (18) 磯部彰「『楊東来先生批評西遊記』劇の成立とその刊行」（『『西遊記』形成史の研究』創文社、1993 年）301-337 頁。
- (19) 嚴敦易「“西遊記”和古典戯曲的關係」（『西遊記研究論文集』作家出版社、1957 年）、前掲注 (18) 磯部氏論文。
- (20) また、現存の楊劇『西遊記』がもとづいた鈔本に絵図があったか否かは判断できないが、現存の楊劇『西遊記』には、この鬼子母掲鉢故事の掲鉢場面の挿絵が見えることは注意される。
- (21) 前掲注 (6) 磯部彰『『西遊記』資料の研究』第 4 章「『唐僧取経図冊』の研究：元代の西遊記絵物語」161-164 頁の分析によれば、元・王振鵬画『唐僧取経図冊』（個人蔵）の上冊第 15 図「玉肌夫人」と同第 16 図「梅檀大仙説野狐精」も唐僧と鬼子母とその子どもに関わる故事を描くものだという。
- (22) 彩繪『本草』については、真柳誠「絵図本草と『本草品彙精要』」60-86 頁、塚本鷹充「『本草品彙精要』と明代宮廷画院」87-132 頁などの検証報告が『杏雨』第 19 号（杏雨書屋武田科学振興財団、2016 年）

- に掲載される。このほか、曹暉「我国古代最後一部未刊藥典：『本草品彙精要』の編纂過程及其版本源流」（『本草品彙精要』①、北京科学技術出版社、2019年）1-44頁に掲載される鈔本の網羅的な系統分析が参考になる。
- (23) 李開先『李中麓閑居集』「王世昌，號歷山，濟南人。與吳偉同時被徵」
- (24) 『明孝宗實錄』卷105弘治八年十月壬戌条：「南京太常寺卿鄭紀進聖功圖，且言：……今皇太子既正儲位，教法未立，加冠有期，宮臣未備。臣謹采前代并聖朝儲君童冠受學踐祚等事，凡百條。每條摘其實事，圖畫於前，又錄其出處，斷論於後，取易蒙卦之義，名曰：聖功圖。伏望宣付東宮講官，以備講讀，庶皇太子見此圖畫，必樂觀而易曉。……紀所上圖，飾以金碧，將取悅禁中，謀為宮僚，聞者耻之。」
- (25) 明後期宮廷での『聖功図』『帝鑑図説』『養正図解』等の制作・受容については、Julia K. Murray, *Didactic Picturebooks for Late Ming Emperors and Prince*, in David Robinson ed., *Culture, Courtiers, and Competition; The Ming Court, 1368-1644* (Cambridge, Ma.: Harvard university, Asia Center, 2008)、林麗江「明代版畫《養正圖解》之研究」（『國立臺灣大學美術史研究集刊』第33期、2012年）他を参照。
- (26) 『酌中志』卷16「内書堂讀書」：「内書堂讀書。……選年十歲上下者二三百人，撥内書堂讀書。……至書堂之日，每給内令一冊，百家姓、千字文、孝經、大學、中庸、論語、孟子、千家詩、神童詩之類，次第給之。……」、『酌中志』卷16「宮内教書」：「……所教宮女讀百家姓、千字文、孝經、女訓、女誠、内則、詩・大學・中庸、論語等書，學規最嚴。……」
- (27) 彩絵『外戚』と彩絵『千家』の制作過程については、前掲注（1）拙稿「明代内府で受容された宋の武人の絵物語」、井上泰山「トレド聖堂参事会図書館蔵『千家詩』（万曆刊本残卷）について」（『汲古』49巻、2006年）26-31頁を参照。
- (28) 『酌中志』卷16「内府衙門職掌・司礼監」および同書卷18「内板經書紀略」。
- (29) 彩絵『孔雀』については、崔曉琳「河南博物院蔵《仙母大孔雀明王經》来源及時代考述」（『古籍保护研究』2019年12月）を参照。彩絵『北斗』については、故宮博物院研究員・翁連溪「嘉靖中宮皇后施写彩繪本《太上玄靈北斗本命延生真經》小考」<https://www.xuehua.us/a/5eb9fd0686ec4d079a98a8c2>を参照。
- (30) 前掲注（29）翁連溪氏の分析によれば、この「中宮皇后」は嘉靖皇帝の第三任皇后方氏（孝烈皇后方氏）だという。
- (31) 彩絵『目連宝卷』については、Rostislav Berezkin, *A Rare Early Manuscript of the Mulian Story in the Baojuan (Precious Scroll) Genre Preserved in Russia, and its Place in the History of the Genre*, CHINOPERL: Journal of Chinese Oral and Performing Literature 32.2, 2013, p. 113を参照。また、正統五年彩絵『目連宝卷』とほぼ同内容を持つ、元〔至元3年〕刊本着彩『目連救母出離地獄生天寶卷』（鄭振鐸旧蔵、中国国家図書館蔵）があるが、元刊本であるため【表1】には掲載しない。
- (32) 両者の関係を考察する論文は枚挙に暇がないが、本稿ではおもに、太田辰夫「『目連救母勸善戲文』所引西遊記考」（『西遊記の研究』研文出版、1984年）139-163頁、苗懷明「两套西游故事的扭结：对西游记录成书过程的一个側面考察」（『明清小説研究』2007年第1期）108-121頁等を参照した。このうち苗氏の論文は、目連故事と西遊記故事の影響関係について述べる先行研究について総合的にまとめている。
- (33) 前掲注（32）苗懷明「两套西游故事的扭结：对西游记录成书过程的一个側面考察」他。
- (34) 『東京夢華録』卷8「中元節」：「要鬧處亦賣果食種生花果之類，及印賣『尊勝目連經』。……构肆樂人，自過七夕，便般『目連救母』雜劇，直至十五日止，觀者倍增。……」
- (35) 前掲注（32）太田辰夫「『目連救母勸善戲文』所引西遊記考」164-165頁。
- (36) 澤田瑞穂「宝卷の変遷」「羅祖の無為教」（『増補宝卷の研究』国書刊行会、1975年）35頁、300-342頁、嶮松青「《銷釈真空寶卷》考辨」（『中国文化』第11期1995年）110頁。また、羅教と五部六冊については、本注の澤田論著と相田洋「羅教の成立とその展開」（『続中国民衆反乱の世界』汲古書院、1983年）1-74頁他参照。
- (37) 前掲注（18）磯部彰『西遊記形成史の研究』266頁所引注（1）と350頁。杜治偉「《永樂大典》所引《西游記》試探」（『明清小説研究』2020年第1期）76-77頁と注②。

- (38) 清黄育榎『破邪詳辯』巻2に『無為』と『自在』についての内容説明が見える。
- (39) 黄天道とその宝巻については、前掲注(36)澤田瑞穂「初期の黄天道」(『増補宝巻の研究』343-365頁を参照。また澤田書217頁には『鑰匙』の書誌情報が掲載される。このほか、清黄育榎『破邪詳辯』巻2にも『鑰匙』の内容説明が見える。
- (40) 弘陽教とその宝巻については、前掲注(36)澤田瑞穂「弘陽教試探」(『増補宝巻の研究』366-408頁を参照。また、清黄育榎『又破邪詳辯』巻1に『臨凡』の説明がある。さらに、早稲田大学図書館のHPに澤田氏旧蔵の『臨凡』が公開されている。
- (41) 車瑞「『西游記』宝巻研究」(『太原理工大学学報』2019年6月第37巻第3期)84-90頁は、この他複数の西游記故事と関わりのある明の宝巻を挙げている。
- (42) 前掲注(36)澤田瑞穂『増補宝巻の研究』25、29頁。
- (43) 早稲田大学図書館澤田旧蔵本より引用。
- (44) 黄育榎が「御馬監程公」を「陳矩」と見なしている根拠は不明であるが、万曆内府に坊刻本を持ちこみ、太子常洛に「鬼子母揭鉢圖」を献上した宦官の名前が、宝巻の制作者として提示されていることには注意を払う必要があるだろう。
- (45) 澤田瑞穂『校注破邪詳辯』(道教刊行会、1972年)122頁より引用。
- (46) 『酌中志』巻16「禮儀房」:「署在東安門外,舊都府草場之東向南。提督太監一員,掌印秉筆攝之。……毎年四仲月,選乳媼,生男十口,生女十口,月給食料,在嬪子府居住。凡宮中有喜鋪月子房,生男、生女各一二口,在文華殿西北臨河之小房住。及報生皇子,則用生女嬪口,皇女則用生男嬪口。……」
- (47) 『宝巻初集』(山西人民出版社、1994年)第14冊収載白黒影印、『西諦藏書善本図録』(中華書局、2008年)280-282頁にカラー影印が部分的に掲載される。
- (48) 明内府の妃嬪、公主と宝巻などの関係を示す本資料については、磯部彰『『普覆週流五十三参宝巻』に見る明末清初期の教派系宝巻の出版について』(磯部彰編『東アジア出版文化研究——にわたり』二玄社、2004年)でも言及される。
- (49) C北京大本の実物は実見の機会を得ていないが、当該部分に関する影印が『第一回北京大学図書館蔵書展覧 中国古籍挿絵本選展』(有隣堂、1987年)68-69頁に収載される。
- (50) 前掲注(36)澤田瑞穂『増補宝巻の研究』67-68、268-271頁。

表1 明内府と関連する彩色絵図本

	時間	名称	版式(尺寸→cm)	制作	所蔵/出典	備考
1	宣徳3=1428	真禪内印屯證虚凝法界金剛智經	彩絵鈔本、図有り、折本、上下双边手鈔紅格、一折6行×1~18字、框縦22.4×横9.5	沈度書/商喜絵	(台) 故宮博物院	上中下。影印とデジタル媒体有り。
2	正統5=1440	目鍵連尊者救母出離地獄生天寶巻一卷	彩絵鈔本、図有り、折本、上下双边手鈔紅格、一折6行×16字、框縦30×横16.3	皇妃姜氏	(露) エルミタージュ博物館	CF元至元3年刊本彩絵鈔本。露本は論文に部分影印有り。
3	成化19=1483	御製全真群仙集	彩絵鈔本、図有り、四周双边紅格、対向双紅魚尾、上下粗紅口、半葉9行×16~22字、内匡郭縦約19×横約14	憲宗朱見深	(中) 国家図書館	5冊、影印有り。
4	弘治6=1493	張皇后籙牒図巻	彩絵鈔本、図有り、卷子、上下双边手鈔紅格	張皇后(孝康敬皇后)	(米) The San Diego Museum of Art	未見。ネット上に部分的情報有り。
5	弘治8=1495	[佚] 聖功図(金碧本)	「金碧」図有り	鄭紀	明実録巻105/万曆野獲編巻4	霍韜・鄧守益嘉靖18(1539)の[佚]聖功図(別名:東宮聖学図冊)有り。

6	弘治 18 = 1505	本草品彙精要	彩絵鈔本、図有り、四周双辺手鈔紅格、同向双紅魚尾、上下粗紅口、有界赤字黒字、半葉 8~10 行×16 字、小双行 14 字 [杏雨原本]	太医院劉文太等奉勅/王世昌等絵図	(日) 杏雨書屋 [原本]/杏雨書屋 [副本]/(中) 国家図書館 [副本]	[原本] 42 卷 36 冊/[副本] 残 3 卷 2 冊 1 函/[副本] 残 11 卷 13 冊。部分影印有り。
7	正徳年間	食物本草/繡像食物本草	彩絵鈔本、図有り、四周双辺手鈔紅格、同向双紅魚尾、上紅口下白口、有界黒字、版心「食物本草/■類」墨書、半葉 8 行×16 字 [国図本]/彩絵鈔本、図有り、四周双辺手鈔紅格、同向双紅魚尾、上下粗紅口、有界黒字、版心題無し、半葉 8 行×16 字、内匡郭縦 23.7×横 16.9 [杏雨本]		(中) 国家図書館/(日) 杏雨書屋	4 卷 4 冊。絵図の祖本は弘治副本にもとづくか。影印有り、未見/3 卷 3 冊。影印有り。隆慶 5 年刊本有り。
8	嘉靖 6 = 1527	九天応元雷声普化天尊説玉枢宝經	彩絵鈔本、図有り、折本、上下双辺手鈔紅格、一折 5 行×14 字、小双行 28 字~30 字、框縦 33×横 16		(日) 天理大学図書館	一帖 1、絵図 43 頁分、部分影印有り。
9	嘉靖 22 = 1543	太上玄霊北斗本命延生真經	彩絵鈔本、図有り、折本、上下双辺手鈔紅格、一折 4 行×8~12 字、外寸(?) 34×15	中宮皇后	個人蔵(オークション)	未見。ネット上に解説論考及び情報有り。
10	嘉靖 22 = 1543	薬師本願功德宝卷一卷仏説三十五仏名經一卷	刊本着彩、図有り、折本、上下双辺黒格、一折 5 行×15 字、框縦 26.3×横 12.7	徳妃張氏	(中) 国家図書館	木記「板在西長安街双塔進西李家鋪内」。影印有り。
11	嘉靖頃	仏母大孔雀明王經	刊本着彩、図有り、折本、上下双辺黒格、一折 4 行×14 字、框縦 30×横 14.7	内官田有澤	(中) 河南省博物院	上中下。未見。
12	万曆 1 = 1573	[佚] 帝鑑図説	丹青図	張居正	張太岳集卷 38	CF フランス国家図書館に、宮内庁書陵部蔵万曆 1 年潘允端刻本の版型、絵図と類似する彩色本伝存(18 世紀?)
13	万曆 14 = 1586	宝善卷	手鈔彩絵、図有り、折本、上下双辺黒格、一折框縦 32.3×横 16.6	大明慈聖宣文明肅皇太后	(中) 社会科学院	4 冊、部分影印有り。
14	万曆 19 = 1591	補遺雷公炮制便覧	彩絵鈔本、四周双辺紅格、同向双紅魚尾、上下粗紅口、半葉 8 行×16 字、匡郭縦 25.7×横 18.5		(中) 中医研究所	14 卷(欠卷 12) 14 冊(首冊目録)、絵図は『本草品彙精要』のものを転用。影印有り。
15	万曆 32 = 1604	仏母大孔雀明王經	刊本着彩、図有り、折本、上下双辺黒格、一折 5×14 字、框縦 28.7×横 15	御製印造	(日) 天理大学図書館	上中下。部分影印有り。
16	[万曆年間]	明解増和千家詩註	彩絵鈔本、上図(附増和詩)下文、四周双辺紅格、同向双紅魚尾、有界黒字、半葉 9 行×15 字、小双行 12~14 字		(台) 故宮博物院、(中) 国家図書館	CF 万曆 2 年刊本が類似体裁を持つ。台湾本、国図本、影印有り。
17	[明代後期]	御製外戚事鑑	彩絵鈔本、図有り、四周双辺手鈔紅格、対向双紅魚尾、上下粗紅口、有界黒字、半葉 8 行~11 行×19~21 字、匡郭縦 26.7×横 16.6		(日) 東洋文庫	5 卷 2 冊。有「宣徳元年四月日」序、CF 宣徳元年刊本[佚]。ネットに影印公開。
18	[明代後期]	太乙集成	彩絵鈔本、図有り、四周双辺手鈔紅格、対向双紅魚尾、上下粗紅口、無界黒字、半葉 9 行×20 字、21.5×14.3 [慶應本]		(日) 慶應大学ス道文庫、(中) 故宮博物院	故宮本、未見。